vinetur

Royal Unibrew、2026年のオーガニックEBIT成長率見通しを6～8%に引き下げ

コスト上昇、フィンランドでの低迷、ベネルクスでの供給問題により、利益上振れの余地が縮小したと経営陣は説明した

2026年11月12日（木）



デンマークのビールメーカーRoyal Unibrewは11月11日水曜日、コストインフレ、フィンランドでの困難、ベネルクスでの供給問題を理由に、2026年のオーガニックEBIT成長率見通しの上限を引き下げたと発表した。

同社はNasdaqを通じて公表した第3四半期の取引状況に関する声明で、2026年のオーガニックEBIT成長率を6～8%と予想していると明らかにした。従来の予想は6～10%だった。EBITは利払い・税引き前利益を指し、オーガニックベースの数値は買収、事業売却、為替変動の影響を除いている。

今回の見直しで会社見通しの下限に変更はないが、通期で実現できる利益成長の大きさについ

て、Royal Unibrewがより慎重な見方を示したことになる。同社によると、変更はコスト上昇の継続、フィンランドでの事業環境の悪化、ベルギー、オランダ、ルクセンブルクを含むベネルクス地域での供給問題を反映している。

Royal Unibrewは今回の更新に際し、グループの売上高と利益が伸びたことも示した。売上高が増える一方で利益見通しが引き締められたことは、販売量を拡大しながらも、経費の高止まりと地域ごとの混乱に直面し、利益率を十分に守ることが難しくなっていることを示唆している。

今回の声明は、多くの飲料メーカーが直面している圧力の一端を浮き彫りにしている。ビールメーカーなどの飲料企業では、原材料、包装資材、エネルギー、運賃、流通コストが高止まりすると、売上高が伸びても利益が同じペースで増えるとは限らない。供給の混乱は、商品の入手可能性を制限したり、物流コストを押し上げたり、主要市場での販売商品構成に影響したりして、さらに負担を増す可能性がある。

Royal Unibrewの説明では、フィンランドとベネルクスが重要な要因となった。同社は単一の要因を受けて全般的に見通しレンジを変更したのではなく、複数の圧力が同時に生じているため、見通しを修正した。フィンランドでの困難が同市場の見通しを押し下げたとみられる一方、ベネルクスでの供給問題は別の重要地域で事業上の課題を生んでいる。これらの要因に全般的なコストインフレが重なり、経営陣は2026年に実現し得る利益の最大水準に関する予想を引き下げた。

今回の更新は1社にとどまらず、Royal Unibrewが欧州のビール市場および飲料市場全体の状況を把握するうえで参考となる企業であることからも重要だ。見通しの引き下げは、基礎的な事業活動がなお拡大していても、コスト、価格設定、利益率をめぐる圧力が続く可能性を示している。複数の国で事業を展開する企業では、ある地域の市場低迷や供給のボトルネックが、他地域での伸びを相殺することもあり、特に注目される。

投資家は、足元の成長よりも見通しの変更を重視することが多い。経営陣が今後数カ月の需要、コスト、事業遂行のバランスをどう見ているかが表れるためだ。Royal Unibrewの場合、見通しレンジの縮小は、経営陣が引き続き営業利益の成長を見込む一方、従来示していたほどの上振れ余地はないと判断したことを示している。

Royal Unibrewは第3四半期の報告の一環として取引状況に関する声明を発表し、年末を前に市場に事業の最新状況を示した。インフレ、フィンランド、ベネルクスに関する同社の説明を受け、飲料グループがどの程度の価格決定力を維持しているか、また、利益成長を守りながら供給や流通の問題にどれだけ効果的に対処できるかに、引き続き注目が集まりそうだ。